

編集後記

今年度、初めて『言語研究』の編集担当を仰せつかった。と言うか、今年度、言語研究センターの運営委員になったばかりである。何をどうすればいいものやら良く分からないまま、他の先生方や事務職員の方のご尽力によって編集作業は進んでいる。厚く御礼申し上げます。この編集後記を今貴方が読んでいるということは、ともかく無事に『言語研究』第34号が刊行されたということであろう。もし刊行されただけでも「無事」ではないとすれば、それは小生の責任である。申し訳ありません。周りの方が懲りずに次のチャンスを与えて下さるのであれば、その時はもう少しうまくやる所存である。

今号は、6編の論文を収録している。原稿募集の段階では原稿が集まるかどうかドキドキしたが、ここ数年の平均的な本数となった。ご投稿下さった著者の方々、査読をお引き受け下さった方々に感謝申し上げます。対象言語は、日本語、英語、韓国語、中国語とバラエティに富み、言語研究センターの紀要に相応しい構成であると思う。また、その中で4編が、教育法、あるいは教育現場での問題を論じたものであり、本学教員の教育への関心の高さを反映しているのではないかと感じる。

学内では目立たない存在のようにも思えるが、言語研究センターは、神奈川大学外国語学部の要である。そして、神奈川大学は、日本で外国語学部を持つ数少ない大学の一つである。日本で国公立合わせて、法学部を持つ大学は93、経済学部は126、経営学部は80、外国語学部は34、人間科学部（人間学部を含む）は29、理学部は43、工学部は116である（Wikipediaによる）。人間科学部を別にすれば、外国語学部というのは、かなり数が少ない。つまり、神奈川大学外国語学部というのは、貴重な存在なのである。言うまでもなく、その教育・研究活動を担う言語研究センターは、重要な存在なのである。現在、言語研究センターは、8つのCALL/LL教室、語学視聴覚室、教材開発室、視聴覚スタジオを備えている。研究面では、70名の所員が所属し、7つの共同研究が進行している。今年度は、ニューズレターの他、この『言語研究』第34号と神奈川大学言語学研究叢書第2巻『モダリティ研究と言語教育』の刊行が予定されている。このような活動は、言うまでもなく所員の皆様に支えられている。これからも、皆様のご支援を賜りたい。

今回編集後記を書くにあたって、過去数年間の編集後記を読んでみた。文学作品を引用したりと、教養あふれる文章が書かれている。小生にはとてもそんな文章は書けないので、この辺で筆を置くこととする。乱文ご容赦下さい。(mk)